

本部だより

●第48号



マーシャル方面遺族会

<http://mibfa1926.com>



携帯サイト

- 発行日: 令和5年8月1日
- 発行人: 高林芳夫
- 本部: 181-0012 東京都三鷹市上連雀8-7-8
- 電話 & FAX: 0422-77-8557
- 編集人: 鈴木千春



クエゼリン基地のラボに保管されている遺品。日の丸と荷物の木札 (金子さんよりご提供)

ごあいさつ

高林芳夫

皆様いかがお過ごしでしょうか？

令和5年4月2日、4年ぶりに第60回慰霊祭を開催することが出来ました。コロナ禍でしたが全国から75名の遺族が集まり、戦没者の御霊に感謝の誠を捧げました。

会が設立され60年の記念すべき年であります。ゲストとして元空将織田邦男様、元マーシャル大使安細和彦様・NHK記者村山世奈様・東日本放送記者高橋直希様・日本旅行島名九重様をお迎えし、織田邦男様には貴重な講話を頂きました。靖国神社には受付の机や椅子・待合室の準備等、ご配慮頂き感謝申し上げます。

慰霊祭では次世代を担う若者の参加が多く、会の将来は安泰との確信を持ちました。

直会(懇親会)では、織田先生を中心に、日本の将来について活発な意見交換が行われました。会の継承について、若い世代に継承されても日本人としての「心」は変わらないと信じます。

会の継承は駅伝のようなもの、過去を継承し、未来へ繋ぐ、次から次へとタスキを繋げる事が出来れば戦没者への慰霊顕彰は末永く続ける事が出来るでしょう。

令和5年度 第60回慰霊祭・総会 報告



地面には桜の花びら

令和5年4月2日(日)4年振りとなる慰霊祭・総会が開催されました。美しい桜の花びらが風に踊る中、全国から75名のご参加をいただきました。



受付

総会は左記の通りに進行了しました。

■総会

- 一 開会の辞
- 一 あいさつ
- 一 活動報告
- 一 会則改訂
- 一 会計報告
- 一 会計監査報告
- 一 今年度行事予定
- 一 その他
- 一 閉会の辞



高林会長



議長・山村副会長



司会・清水副会長



参集殿2階

- ・ 司会・清水副会長より挨拶があり、山村副会長を議長に指名。山村副会長が開会を宣言した。

- ・ 高林会長より挨拶、続いて朝香名誉会長、大給相談役、安細篤志会員、ゲストの島名氏(日本旅行)、高橋氏(東日本放送)、村山氏(NHK)、織田氏よりそれぞれご挨拶をいただいた。

- ・ 高林会長からコロナで中止期間中の活動報告。

- ・ 議長から会則の改訂案の説明があった。内容・会則第10条【会友】を改訂し、当会の趣旨にご賛同いただける方を、会員推薦のうえ、「会友」とする案。

- 今までの会則第10条【会友】
戦没者の戦友等で本会の目的に賛同する者を、役員会の承認を経て会友とすることができます。



- 改訂 第10条【会友】
会員から推薦をうけた本会の目的に賛同する者を、役員会の承認を経て会友とすることができます。



大給相談役



朝香名誉会長

議長より承認を求めたところ、満場一致で承認された。今総会后、施行される。会計の保延副会長より会計報告。監事吉田氏より「適正に処理されている」との会計監査報告があった。会長より今年度の行事予定の説明。議長より閉会が宣言され、総会は終了した。



高橋さん（東日本放送）



島名さん（日本旅行）



篤志会員・安細元大使



村山さん（NHK）



会計・保延副会長



監事・吉田さん

講話

織田邦男様

総会のあと、元空将・織田邦男様に約30分の講話をいただきました。織田様の叔父様が海軍パイロットであり、ギルバート諸島上空で散華されました。叔父様の遺影は、織田様が戦闘機パイロットを目指すきっかけになったとのこと。長年、最前線で国防の任についておられた織田様のお話は、説得力があり大変貴重でした。「戦前、戦中の日本人の感覚として、個人と国家が一体であった」という言葉がとても印象的でした。



2階から見た桜

へ向かいまし
た。お祓いを
け、朝香名誉
長が祭文を奏
上されました。
その後、本殿
にあり玉串奉
奠者とともに
全員が参拝し
慰霊祭は無事
に終了しまし
た。



元空将・織田邦男様

(崇敬奉賛会の会報、月刊「靖國」令和4年3月号・第800号にも織田様の叔父様の写真と寄稿文が掲載されています)

■写真撮影 隣室で集合写真を撮影
■慰霊祭 12時より昇殿参拝

1階の参集殿に移動し、朝香名誉会長、高林会長、玉串奉奠者を先頭に拝殿

慰霊祭参加者 75名 (敬称略・順不同)

- 名誉会長 朝香誠彦 朝香貴子 相談役 大給乗龍 大給三枝子 篤志会員 安細和彦 安細菊乃 宮城県 佐藤 勉 山形県 長岡正昭 長岡昭子 石川県 河崎仁衛 茨城県 黒澤みどり 山梨県 吉原太郎 東京都 内海淑子 松江孝枝 浜田つき子 浜田正二 浜田悦子 浜田祐一 浜田房枝 川田吉江 川田真実 金沢京子 金沢良太 小林すみ子 小林隆司 鈴木千春 米林義昭 米林美智子 居戸和由貴 古田誠一郎 保延 務 保延 恒 間々田征史 間々田邦子 小田原英美子 吉村真澄 和田一郎 埼玉県 小室洋子 佐藤知子 齊藤玲子 齊藤百香 齊藤好香 齊藤幸生 長屋綾子 長屋ゆり子 長屋裕太 長屋政喜 高林芳夫 高林正子 大井和子 小松順子 鈴木裕子 植田和明 竹内紀子 眞鍋信一 眞鍋公代 小田原利子 小田原靖 張替淳子 平野裕美 平野 稜 藤田朋子 神奈川県 石澤洋子 清水雅尚 秋山正之 服部政久 岐阜県 吉田正明 愛媛県 山村一郎 白方勝彦 香川県 金森

越哉 金森佳子 ゲスト 織田邦男 島名九重 高橋直希 村山世奈

直会(懇親会)

昇殿参拝のあと、希望者はアルカディア市ヶ谷2階、中国料理「翠」に移動し、13時より「直会」を開催しました。

参加人数は39名。4つのテーブルにわかれて着席。乾杯のあと、歓談しながら中国料理のコースをいただきました。

コロナで中止だった時期に入会された新入会員の自己紹介、その他、各人の近況報告、織田様への質問コーナーなど、終始にぎやかに懇親し、15時30分過ぎにお開きとなりました。





当日朝の靖國神社

直会 参加者 39名 (敬称略・順不同)

佐藤 勉 長岡正昭 長岡昭子 河崎仁
衛 吉原太郎 内海淑子 松江孝枝 小
林すみ子 小林隆司 鈴木千春 米林義
昭 米林美智子 居戸和由貴 古田誠一
郎 藤田朋子 保延 務 保延 恒 小
室洋子 佐藤知子 齊藤玲子 齊藤百香
齊藤好香 齊藤幸生 長屋綾子 長屋ゆ
り子 長屋裕太 長屋政喜 高林芳夫
高林正子 張替淳子 平野裕美 平野
稜 石澤洋子 清水雅尚 吉田正明 山
村一郎 白方勝彦 織田邦男 高橋直希

慰霊祭のご感想をいただきました

◎古田誠一郎さん(東京都)初参加

慰霊祭・総会・直会に参加させて頂きました。コロナ禍のため平成31年以来4年ぶりの開催とのことでした。

私にとりましては、令和3年に入会させて頂いてから当会の皆様とお会い出来る初の機会であり、また以前より靖國には何度も参拝してりましたが、昇殿参拝は初めての経験でしたので、普段とは違う緊張を感じつつ靖國の鳥居をくぐりました。

会長をはじめ皆様が暖かく迎え入れて下さり、大変感謝致しております。また私と同世代や更に若い方々も多数参加しておられ、非常に心強く感じました。

直会では会員の皆様の戦没されたご親族への思い、また会の歩みや次世代への継承のお話など、大変貴重なお話を直接伺う事も出来、私も微力ながら会の活動の一助になれば、また皆様の思いを引き継ぎ、更に次の世代へと橋渡しをしなれば、との思いを新たに致しました。
東京都には死没者原簿しか残っておら

ず、大叔父(陸軍・クエゼリンで戦没)

の生きた証が紙一枚、文にして一行だけではあまりに不憫と思い、入会させて頂きました。大叔父のみならずマーシャル方面で共に戦われた全ての英霊の皆様へ感謝と哀悼の誠を捧げ、また子孫の皆様と共に当会の発展に寄与することで、大叔父も喜んでくれるのではないかと、今はそう考えております。

当日運営に携わられました会長以下役員の皆様、またお目にかかれました会員の皆様、誠にありがとうございました。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

◎黒澤みどりさん(茨城県)初参加

散り残る桜の美しい4月の日曜、慰霊祭に参列し、ウオッセ島で命を落とした祖父を思いつつ、戦没者の御霊に感謝とご冥福の祈りを捧げました。

祖父の出征時に2歳であった私の父は祖父のことを全く覚えておらず、水兵姿の遺影をよすがに父親を終生、恋い慕っておりました。その父が本年2月に他界し、私はその遺志を継ぐべく、このほどマールシャル方面遺族会に入会いたしました。

「お前の親父は体が大きく、足が早く、とても優しい人だった」と生前の祖父を知る人が教えてくれたと、父は私が幼いころに話してくれました。このためか、私には「戦死したお祖父さん」は何となく地元の民話の登場人物のように感じられていたように思います。「お父さんのお父さん」だけれど実在の手応えを感じていない、今思うとそのような感覚でした。

しかし今回、慰霊祭で全国からご参集された多くのご遺族の皆様のお姿を目にしたとき、祖父の人生が一気に現実感を帯びて腑に落ちたように感じられました。同じように大切なお身内を失った方々のご思念に目の曇りが拭われる思いでした。もっと早く入会させていただき参列すべきであった、なぜ父が亡くなるまでぼんやりしていたのかと、込み上げる悔恨の念を噛み締めつつ、靖国神社を後にいたしました。ようやく感じた祖父の手応えを再び失わぬよう、来年は息子を伴って参列したいと思っております。

◎平野裕美さん(埼玉県)初参加

今回、初めての慰霊祭・直会でした。

マーシャル方面遺族会が長年続いてきた理由が、とても深く英霊を思う愛で紡いできた会だと知り、私はただただ感銘を受けました。直会では、皆様とお話しができ、思いの強さや英霊への愛を感じ、凄いの一言です。至らない所が多々ありますが、ご指導の程よろしくお願い致します。

遺児の方々と英霊の奥様が、一生懸命繋いできた会だと思っております。後世に残していける様に頑張らないといけないと思っております。英霊も、戦争に行かざるをえなく行つて、帰りたくても帰れない状態がずっと続いているのだと思うと、私は自分に何ができるかを、ただ考え続けております。

高林会長を始め、私の大叔父(陸軍・海上機動第一旅団)と一緒に闘った仲間のご遺族のバトンを繋がせて頂きます。思いの強さをお教え頂き、本当にありがとうございます。

◎佐藤 勉さん(宮城県)

桜が散り始めた4月2日、コロナ禍で中止が続いた「慰霊祭」が4年振りに靖

国神社で行われた。

昭和38年、クエゼリン戦没者遺族会が設立され、41年には対象地域がマーシャル諸島全域に拡げられ、名称も「マーシャル方面遺族会」と改称された。親・兄弟、妻の世代が多数だった当時(最盛期の)会員数は2千名だったが、現在は私たち遺児に引き継がれ、会員数は160名に減少した。

慰霊祭当日、受付では会長が笑顔で会員を迎えていた。私は皆さんに会いたくて急いで2階「楠の間」に行った。

会場には、すでに多くの方が集まり、それぞれが4年振りの再会に「また、お会いできましたね」と高揚感に満ちた表情で喜び合い、手をとって話に花を咲かせていた。

昇殿参拝終了後、直会が行われた。今まで面識のなかった方々でも、何か共通した縁の糸に結ばれているかのように、初対面とは思えない、親近感があって心底から語り合える意義のある慰霊祭だった。





左から和田さん、高林会長、古田誠一郎

「千鳥ヶ淵戦没者墓拜礼式」

古田誠一郎

令和5年5月29日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて厚生労働省主催による拜礼式が挙行されました。開式に合わせたかの如く折からの雨も止み、皇族からは初のご臨席となる佳子内親王殿下をお迎えして、厳かな空気の中で開式となりました。

厚生労働大臣による式辞・納骨のち、佳子内親王殿下の御拝



慰霊当日、軍装の若者が一糸乱れぬ行進

礼と同時に関係者一同が拜礼し、内閣総理大臣、遺族代表、関係国駐日大使、衆・参厚生労働委員長、外務・環境・防衛の各大臣、各政党・各関係団体代表、厚生労働大臣が順に献花して、式典が終了しました。

本日は硫黄島・ロシア方面にて収集された235柱が納骨され、これまでに納められたご遺骨と合わせると37万485柱となりました。

当会からは、高林会長、和田一郎さん、古田誠一郎の3名が参列致しました。

新入会員

(島名 戦没者との続柄)

- 千葉県 織田邦男様(ギルバート諸島 甥)
 - 茨城県 黒澤みどり様(ウオッセ島 孫)
 - 埼玉県 平野裕美様(クエゼリン島 大姪)
 - 静岡県 富岡滋子様(クエゼリン島 姪)
- ご入会ありがとうございます。

訃報

長野県 小林英雄様(黒澤みどり氏の父)
謹んでお悔やみ申し上げます。

寄付者 御芳名(敬称略)

- 二万円 高林芳夫・諸岡恒一・橋本勝彦
- 一万四千元 石川正興
- 一万円 朝香誠彦・大給乗龍・安細和彦
- ・織田邦男・保延 務・榎本益明
- ・吉田正明・番場信子・古田誠一郎
- ・富岡滋子・小松良策・渡辺三枝子
- 九千元 飯島祐宣
- 七千元 黒川正文・奥井國夫・西田寿子
- ・上村秀樹・藤原和子・藤田洋子
- ・廣島正光・廣原 實・渡部 守
- ・富田キミ・長岡俊夫
- 六千元 小室洋子・内海淑子
- 五千五百円 井上賀彦・浜田つき子
- 五千円 佐藤 勉・長屋綾子・斎藤玲子
- ・宮城 勇・小林すみ子・植田和明
- ・黒澤みどり・富田佳代子・酒井則夫
- ・平野裕美・張替淳子・島名九重
- ・和田一郎
- 三千五百円 安藤としえ
- 三千円 福永弥生・安藤正子・泉水堯恵
- ・小山浩二・清水雅尚
- 二千五百円 東地井義訓
- 二千元 下釜正義・本保美恵子・西岡純一

・高坂和靖・山本敏夫・三好茂勝
 ・馬場 清・藤田朋子・原田記子
 ・吉原利美・鈴木友希子・宮下勤子
 ・吉原太郎・坂本公洋・山田昭雄
 ・大山節子・千田啓子・山田二美
 ・小林ヨシ子・米林義昭・山口良二
 ・天野好子・佐藤亨三・藤本泰子
 ・鈴木裕子・石澤洋子・安西裕子
 ・瀬戸隆子・北條 晃
 千五百円 山村一郎・河崎仁衛・鈴木千春
 ・白方勝彦・佐藤知子・秋山正之
 千円 間々田正史・居戸和由貴
 五百円 安藤正也・葛西 勉・雛形明美
 二十弗(ドル) 石神康巨
 ※合計四十五万九千五百円+20ドルのご
 寄付を頂きました。
 心より感謝を申し上げます。

未納会費 納入のお願い

5月30日現在の会費未納者は、現在22名です。お忘れになっている方は、納入をお願いいたします。

金子昌夫さん

クエゼリンより一時帰国

会報46号にて、ご紹介しましたクエゼリン基地の金子さんから、一時帰国のご連絡を昨年末にいただき、一月に高林会長と鈴木との2名で面会しました。初対面につき当方は緊張していましたが、気さくで明るいお人柄でホッとしました。

現在はクエゼリン基地のお仕事を辞められて米本土に戻られたとのこと。とはいえ時おり、基地パイロットの指導や、日本から遺族会が来島する際の航空機の操縦ためクエゼリン基地に行かれるそうです。また、現地の慰霊碑はキレイに維持管理されているそうです。

市ヶ谷のカフェで2時間以上、懇談いたしました。金子さんが「今から靖国神社に向かう」とのことでしたので我々も一緒に、遊就館の「副碑」にご案内しました。現地を知る方が、当会にご協力いただけることは大変ありがたい、これからも情報共有させていただきます。 (鈴木)



現地に残る木札

※宛名の「第七拓南丸」は米航空母艦レキシントン及びインディペンデンス艦載機による空爆をうけ、昭和18年、ルオット島南部内海で沈没 (大日本帝国海軍サイト 特設艦船データベースの情報)



遊就館の副碑の前で

令和5年度 国主催の慰霊巡拝について

『慰霊巡拝の参加者募集』（本事業は、国の

令和5年度予算成立により確定します）

- ・主催 厚労省
- ・実施予定地域 マーシャル諸島
- ・実施期間 10日間
- ・令和6年3月6日(水)～3月15日(金)
- ・申込資格 戦没者のご遺族
- ・申込資格 戦没者のご遺族
親・配偶者・子・兄弟姉妹・孫・
参加する子・兄弟姉妹の配偶者・甥姪
- ・募集人員(全国) 15名
- ・申込書類提出締切日 10月25日(水)
- ・経費 所要経費の3分の1程度が、国から補助される。
- ・提出書類
- ・詳細は各都道府県へお問合せください
- ・申込方法
東京都在住の方は東京都で仮受付を行います。都外在住の方はお住まいの道府県で受けをします(受付期間や方法は各道府県へお問合せ下さい)

令和5年度 戦没者遺児による 慰霊友好親善事業

・主催 日本遺族会

・実施時期 令和6年3月2日(土)～

3月10日(日)の8泊9日

・募集人員 40人

・申込締切 令和5年11月1日

・参加費 10万円

・参加資格 戦没者の遺児

・遺児慰霊友好親善事業では、令和5年度から青年部(戦没者の孫、ひ孫、甥姪の3親等内親族)の付添者に対し、国から旅費の3分の1が補助されることになった。

・申込方法 在住する各都道府県遺族会事務局へお問い合わせください。

事務局より

高齢の遺児が、事務や会報の発送作業を行っています。東京近郊にお住まいの方で、運営のお手伝いをしていただける方は、ご連絡をお待ちしています。

竹之下和雄様 特別インタビュー①

鈴木千春



竹之下和雄様

昭和16年生まれ 本籍・鹿児島
昭37年 厚生省入省・援護局
平成12年 退官 退官後、公益財団法人
人中国残留孤児援護基金に65歳まで勤務、現在は一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会の専務理事

今から50年前の昭和48年、日本政府はマーシャルの島々に遺骨収集集団※を派遣しました。その中の厚労省(当時厚生省)担当者として、現地に赴かれた竹之下和雄さん(当時31歳)に、貴重な体験談を伺いました。

今回の第1弾は、戦後の遺骨収容に関するお話、次号の第2弾で、船でマーシャルへ遺骨収容に行ったお話と数回にわけて連載します。

※竹之下さんは筆者がウオッセ島へ遺骨収容に行ったときの団長で、平成31年の当

会の慰霊祭にもご参加いただきました。

者の遺骨よりも、その日生きること（生活）が最優先だったようです。

●入省されたときのお仕事は？
私は昭和37（1962）年、厚生省の援護局※に入り、当時は加算恩給がはじまった頃で、最初の仕事が「軍人の恩給」でした。勤務地は市ヶ谷（現在の防衛省の場所）で、当時、霞が関以外に市ヶ谷台の元陸軍庁舎に、援護局の一部（恩給庁舎）がありました。業務が進むと徐々に縮小され、昭和39年に霞が関に合流しました。

昭和27年に日本は、講和条約を結び、国会でも遺骨収容をやるうという動きがありました。（実際に行ったのは28年になってから）。しかし、世界の膨大な地域に、膨大な遺骨がある。とてもじゃないが全部はできないだろうと、最初からあきらめていたようです。なぜなら当時の日本は、弱く貧しく外貨もなく、国力がありませんでした。

●今まで遺骨収容に行った地域は？
シベリア、インドネシア、フィリピン、ブーゲンビル、カザフスタン、マリアナ、ヤップ、マーシャル等の地域です。

●最初の昭和28年の遺骨収容の方法は？
記録では、帆船・日本丸※をチャーターし、南方八島※を巡りました。各島で収容された中から5〜6人分の遺骨を代表者「象徴遺骨」とし、それを約5年続けたようです。昭和35年に「概了」（援護で作った言葉。おおむね終了の

●竹之下さんの最初の遺骨収容は？
1回目は、昭和45年2月硫黄島です。小笠原返還直後であり、毎日山ほど遺骨を収容しました。ある壕では300柱も埋まっていました。2回目も硫黄島です。3回目が昭和48年、船でのマーシャル遺骨収容です。

●いつ遺骨収容は再開されたのですか？
「もはや戦後ではない」と言われた昭和30年、やっと戦後を抜け出した思いになり、30年代後半には所得倍增計画が始まり商社が海外へ出ていきはじめると、「日本人戦没者の遺骨がたくさんあるよ」と海外からの声が開こえてきます。

●当時の国内の様子は？
国民は敗戦により、何もかもを失くしましたので困窮し、昭和20年代は、戦没



1953年遺骨収集航海出航式
（記念財団刊「帆船・日本丸」より）

まず先に「戦友会」が動き始めました。戦後15年も経てば、元軍人の中にはお金



運輸省航海訓練所・練習船 日本丸 1952年ころ
（記念財団刊「帆船・日本丸」より）

意）として、以降は中断されたそうです。「援護30年史」には「海岸近く象徴遺骨だけではないか」といのか」とい

う人もいた、と記述もある。しかし当時は生きることのほうが大変だった時代。国は、生きている人を優先させました。「今の国力じゃ無理です、英霊の皆さん勘弁してください」という時期だったと思います。

持ちになつてゐる人もいますし、亡くなつた戦友との約束で「俺が迎えに行く」と、自分たちでかつての戦地に行き始めたのです。彼らは55〜60歳となり定年退職した人が中心になつて行き始めました。国会でも「国は何をやつてゐるんだ？」となつて、国も派遣を決定。それなら戦友会と一緒に届けばいいじゃないかと、昭和40年代に国と戦友会が遺骨収容へ行くようになりました。

●「戦没者を迎えに行こう」という世の中になつたのですかね？

いや、実は当時「戦後処理はこのへんでいいじゃないか」という社会の風潮があつたんです。昭和30年代の終わり頃。戦争が終わつてまだ20年もたつていないのに！ですよ。戦没者に対してあまりにも日本人があつさりしているというか、遺骨収容を打ち切ろうとする動きがあることに、私も驚きました。Aという援護局長が就任の挨拶で「援護局を解散する準備をするために来た」と言いました。この言葉に、ずつと真剣に取り組んできた人たちが強く反発しました。

援護局の先輩に、元陸軍参謀本部（元

中佐）の三浦さん（当時50歳くらい）という方がいました。その方は陸軍省から第一復員省―引揚援護庁―援護局と、ずつと戦後処理を熱心にやつてきた人です。三浦さんは私に、

『日露戦争は局地戦で、勝ち戦、それでも戦後処理（全体の始末）に30年かかつた。今回は東南アジアも巻き込んで戦域が広がつた、しかも負け戦だ。これが10年20年で終わるわけがない！百年かかると思つてゐる。だから君のような若者がこの事業を支えて欲しい！』

この言葉にジーンとききました。それ以来、私は（退官まで）厚労省での異動の話を通つてずつと援護局に、そして今でも遺骨収容に携わつています。でないと、当時の思いを知る者が誰もいなくなる。ホントに三浦さんの言つた通り、まだ終わらないまま、もうすぐ戦後百年が来ちゃうじゃないですか。

●竹之下さんは、三浦さんの思いに込めて、ずつと遺骨収容をされているのですね。各遺族会はそのころ動きはなかつたのですか？

まだまだ日本は貧しく、生活が大変で

余裕がなかつた。ほとんどの遺族会員は戦没者の親の世代、未亡人は遺児を抱えて苦勞していますし…。昭和40年代後半に、少しずつ遺族会も遺骨収容に参加するようになってきました。（次号につづく）

※公式には「遺骨収集」という語句が使用されているが、筆者（鈴木）は「収集」という言葉に違和感があるため公式名称以外は遺骨「収容」と表記している。

※援護局とは（厚労省HPより）終戦に伴う引揚者対策に始まり、後に戦傷病者及び戦没者遺族等の援護に対応。さらに戦没者の遺骨収集事業を実施している。

※帆船・日本丸（横浜に係留）国指定重要文化財。日本丸が派遣された理由は、交通手段の発達していない時代だったため。

※南方八島（南鳥島、ウエーキ島、サイパン島、テニアン島、グアム島、アンガウル島、ペリリュー島、硫黄島）の各島を巡航し、慰霊碑を建立、慰霊祭（洋上も）を執行、合計440柱の遺骨を収容した。1月31日東京を出港し、3月19日帰港まで48日間。過酷なジャングル内での遺骨捜索、発掘収容には、政府派遣団以外に実習生及び乗組員（合計171名）の多大なる奉仕と努力があつた。広大な地域を限られた日数と人員、さらに交通の不便、入域の制限等の悪条件の中での活動だった。



第60回マーシャル方面遺族会慰霊祭 令和5年4月2日 於 靖国神社

※事務局へのご意見・ご感想、投稿記事、マーシャル関連情報などお寄せください。
お問合せ先 事務局・高林 048-223-6110 携帯090-3337-4531 メールアドレス takabayashi.yoshio@khaki.plala.or.jp